

SHIMIN PRESS の
バックナンバーは
インターネットで
ご覧頂けます。
WEB SHIMIN
http://www.shimin.info

SHIMIN PRESS

市民プレス：第13号

2004年01月01日
(隔月刊、無料配布)
発行人 特定非営利活動法人
「市民フォーラム」
編集人 原 昭二
制作・印刷 デジタル工房
F A X 048-476-9111
〒353-0004
埼玉県志木市本町5-18-24

都市化の課題… 人と自然との共生を考える

黒目川の河岸段丘 「妙音沢」の緑地保全

すでに本紙六号でも取り上げたが、豊富な植生、湧水で知られる新座市栄の黒目川沿いの斜面林を天然記念物に指定するよう求める声は、市民グループの活動、署名運動によって高まりつつあるが、なかなか指定の手続きは進んでいないようだ。

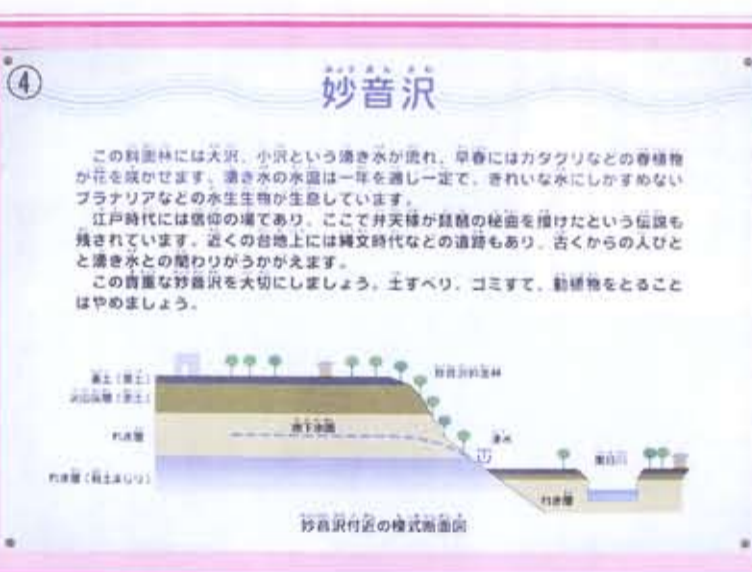
その間に土すべりやゴミ捨て、自生する貴重な動植物が心ない人によって踏まれ、抜き取られ、危機は迫ってきた。

空から眺めると(航空写真を参照)、妙音沢は、池田三丁目から北の栄一丁目に向かって走る一筋の森が黒目川に接した地点に当り、その西側を新座高校のグラウンドが占める。黒目川の下流に延びた斜面林の上は新座市営墓地、その東には広大な陸上自衛隊の朝霞駐屯地、訓練所が広がっている。かつては左岸に農家が点在していたが、丘の上は山林であった(明治時代の白地図を参照)。

このたび新座市は、栄一丁目の斜面林(妙音沢)約三・二ヘクタールを、環境保全型の緑地と位置づけ、緑地保全地区に関する都市計画決定を行うことになり、去る十一月二十六日から十二月十日まで市民に対して計画案の縦覧を行った。

計画された案は十二月下旬の都市計画審議会承認され、ようやくこの地域の保全のスタートが切られた。

この沢は、江戸時代には滝見の参道や茶店があったと伝えられており、この沢にまつわる沢山の話から、歴史的な地域であることが分かる。しかし戦後は斜面林上部の平坦地帯がすべて住宅となり、緑地保全区域の一部には、駐車場や資材置き場などが設けられて、保存地区域をこれからどう管理してゆくか、多くの課題を抱えたままのスタートである。



1. 明治二十年発行の白地図を一部着色したものの
2. 航空写真(昭和58年11月撮影) / 空から見た埼玉28市、日本交通公社出版事業局、昭和59年発行
3. 妙音沢畔から市場坂の鉄橋を望む
4. 妙音沢付近の断面を示す模式図(埼玉県土整備事務所提供)
5. 急傾斜崩壊危険区域を示す標示
- 6・7. 大沢の湧水
8. 人工の石組みと、小沢に迫る住宅

ここからは離れて下る黒目川の河畔には、水車が動き、いくつもの伸銅工場が稼働していた。今、その多くは高層の住宅となっており、景観はまったく変わってしまった。

最近埼玉県の整備事業として周辺に掲示板が立てられた。この地域は掛け替えの無い貴重な自然を残しており、心ない人々によって決して荒らされてはならないこと、と同時に、崩壊の危険に曝されていることなどを近隣の住民に告知している。言葉を変えれば、貴重な妙音沢の自然を保全するため、地域の住民の方々の積極的な協働を訴えている。自分たちの隣地を守る気持ちは絶対欠かせないのだ。



新座市馬場二丁目、畑中二丁目を流れる黒目川の右岸、陸上自衛隊の段丘の下には、妙音沢から途切れながら一筋の森が続き、朝霞市膝折に入っ

黒目川は 朝霞市膝折へ

写真右・水川神社の鳥居。奉納した方々の中に、膝折の伸銅業、徳生家、奥住家などの名前が見られる
写真上・黒目川の右岸には、かつて伸銅業が栄えた



その⑫

新座郡とは？

近隣四市の二〇〇〇年の基盤

歴史的な共通性

新羅からの渡来人

賛成か反対かは別として、朝霞・新座・和光・志木四市の合併問題が幾度となくテーマとされてきた。もし合併するのであれば、この四つの市で行うのが一番よいのではないかと、という共通理解のようなものがある。なんとなく住民の中にあるの

県内ではほかに、七一六(霊龜)年、東国各地にいた一七九人の高麗人を集め、現在の日高市を中心とする地域に、高麗(こま)郡を置いたことが知られる。

渡来人は、最初は近畿地方に入り、要職につく者も多かったが、次第に東国に移住して、開墾にあたる人たちがふえてきた。

見つけ出された志木郷

当時、「郡」の下には「郷」が置かれていた。十世紀につくられた「和名類聚抄(わみやうりょう)」という百科事典的な本によると、新座郡は「志木郷」と「余戸(あまると)郷」からなっていた。当初の規定によると、「郷」は五〇戸からなり、五〇戸にみたないものは「あまり分」として、「余戸郷」としたものだ。だから、形式的には郷が二つあったことになるが、郷プラスおまけの郷と

「郷」が置かれていた。十世紀につくられた「和名類聚抄(わみやうりょう)」という百科事典的な本によると、新座郡は「志木郷」と「余戸(あまると)郷」からなっていた。当初の規定によると、「郷」は五〇戸からなり、五〇戸にみたないものは「あまり分」として、「余戸郷」としたものだ。だから、形式的には郷が二つあったことになるが、郷プラスおまけの郷と

「郷」が置かれていた。十世紀につくられた「和名類聚抄(わみやうりょう)」という百科事典的な本によると、新座郡は「志木郷」と「余戸(あまると)郷」からなっていた。当初の規定によると、「郷」は五〇戸からなり、五〇戸にみたないものは「あまり分」として、「余戸郷」としたものだ。だから、形式的には郷が二つあったことになるが、郷プラスおまけの郷と

「郷」が置かれていた。十世紀につくられた「和名類聚抄(わみやうりょう)」という百科事典的な本によると、新座郡は「志木郷」と「余戸(あまると)郷」からなっていた。当初の規定によると、「郷」は五〇戸からなり、五〇戸にみたないものは「あまり分」として、「余戸郷」としたものだ。だから、形式的には郷が二つあったことになるが、郷プラスおまけの郷と

「郷」が置かれていた。十世紀につくられた「和名類聚抄(わみやうりょう)」という百科事典的な本によると、新座郡は「志木郷」と「余戸(あまると)郷」からなっていた。当初の規定によると、「郷」は五〇戸からなり、五〇戸にみたないものは「あまり分」として、「余戸郷」としたものだ。だから、形式的には郷が二つあったことになるが、郷プラスおまけの郷と

「郷」が置かれていた。十世紀につくられた「和名類聚抄(わみやうりょう)」という百科事典的な本によると、新座郡は「志木郷」と「余戸(あまると)郷」からなっていた。当初の規定によると、「郷」は五〇戸からなり、五〇戸にみたないものは「あまり分」として、「余戸郷」としたものだ。だから、形式的には郷が二つあったことになるが、郷プラスおまけの郷と

「郷」が置かれていた。十世紀につくられた「和名類聚抄(わみやうりょう)」という百科事典的な本によると、新座郡は「志木郷」と「余戸(あまると)郷」からなっていた。当初の規定によると、「郷」は五〇戸からなり、五〇戸にみたないものは「あまり分」として、「余戸郷」としたものだ。だから、形式的には郷が二つあったことになるが、郷プラスおまけの郷と

もつとも、現在は西東京市に含まれる旧保谷市地区や、練馬区の大泉地区も、もとは新座郡に属していた。この東京地区をのぞけば、上記四市域が、歴史的つながりから互いに親近感をもちあうことは自然であろう。

新羅からの渡来人が武蔵国にきたのはこの時が初めてではなく、すでに七世紀末からはじまって

新羅からの渡来人が武蔵国にきたのはこの時が初めてではなく、すでに七世紀末からはじまって

新羅からの渡来人が武蔵国にきたのはこの時が初めてではなく、すでに七世紀末からはじまって

新羅からの渡来人が武蔵国にきたのはこの時が初めてではなく、すでに七世紀末からはじまって

新羅からの渡来人が武蔵国にきたのはこの時が初めてではなく、すでに七世紀末からはじまって

新羅からの渡来人が武蔵国にきたのはこの時が初めてではなく、すでに七世紀末からはじまって

新羅からの渡来人が武蔵国にきたのはこの時が初めてではなく、すでに七世紀末からはじまって

新羅からの渡来人が武蔵国にきたのはこの時が初めてではなく、すでに七世紀末からはじまって

新羅からの渡来人が武蔵国にきたのはこの時が初めてではなく、すでに七世紀末からはじまって



志木市、牛王山(こぼろやま)のいい伝え

江戸時代後期の武蔵国志木市を考えてしまいがちだ。だが、志木市域でこの名が使われるようになったのは、明治になつたのは、引又町と館村の合併問題をきっかけとしてである。このとき、合併後の地名をめぐって、一年以上にわたる紛糾がつづいた。

江戸時代後期の武蔵国志木市を考えてしまいがちだ。だが、志木市域でこの名が使われるようになったのは、明治になつたのは、引又町と館村の合併問題をきっかけとしてである。このとき、合併後の地名をめぐって、一年以上にわたる紛糾がつづいた。

江戸時代後期の武蔵国志木市を考えてしまいがちだ。だが、志木市域でこの名が使われるようになったのは、明治になつたのは、引又町と館村の合併問題をきっかけとしてである。このとき、合併後の地名をめぐって、一年以上にわたる紛糾がつづいた。

江戸時代後期の武蔵国志木市を考えてしまいがちだ。だが、志木市域でこの名が使われるようになったのは、明治になつたのは、引又町と館村の合併問題をきっかけとしてである。このとき、合併後の地名をめぐって、一年以上にわたる紛糾がつづいた。

江戸時代後期の武蔵国志木市を考えてしまいがちだ。だが、志木市域でこの名が使われるようになったのは、明治になつたのは、引又町と館村の合併問題をきっかけとしてである。このとき、合併後の地名をめぐって、一年以上にわたる紛糾がつづいた。



牛王山のいま(和光高校の南に所在)

「にいぐらごおり」が発刊されて三十年余り

新座市は、武蔵野の面影をとどめる緑の自然と共々、昔から、「武蔵国民の行動を促し、地域に新座郡」の文化が花開いてきた。しかし戦後の高度成長の政策によって、開発の波は、貴重な遺産をこわし、住民の生活を脅かすに至った。座視するに耐えられない住民の方々にあって、「新座の環境と歴史を守る会」が結成されたのは、昭和四十年代のことであった。

謎

△	△	△	△	△	△
○	○	○	○	○	○
▽	▽	▽	▽	▽	▽
◇	◇	◇	◇	◇	◇
□	□	□	□	□	□
△	△	△	△	△	△

解答(問題は4面に)

この会の機関誌として創刊された季刊「にいぐらごおり」は、地域の市民の熱意によって支えられ、受け継がれてきた。ごおり」誌に学ぶところは少なくない。記して感謝の意を表明したい。

この会の機関誌として創刊された季刊「にいぐらごおり」は、地域の市民の熱意によって支えられ、受け継がれてきた。ごおり」誌に学ぶところは少なくない。記して感謝の意を表明したい。

この会の機関誌として創刊された季刊「にいぐらごおり」は、地域の市民の熱意によって支えられ、受け継がれてきた。ごおり」誌に学ぶところは少なくない。記して感謝の意を表明したい。

あなたへの メッセージ

志木地域の歴史をさぐってみても、武將とか武士の気配を感じさせるものはほとんどない。しかし、上宗岡在住の歌人細田千虎(ちとら)氏が語る細田家の歴史のなかからは、戦国末期の動乱にまきこまれた武將の姿が浮かんでくる。その糸口となったのは、遠い日の氏の幼児体験である。

先祖は落ち武者?

氏は、五月の節句に鯉のぼりをあげてもらったことがなかった。言い伝えによれば、細田家の先祖は小田原の後北条氏の支配下において、柳瀬川沿岸の滝の城(所沢市大字城)を守っていた武將(家老)であった。しかし、天正十八(一五九〇)年豊臣秀吉方の軍勢に攻められ、ここ上宗岡に落ちのびてきたという。だから、鯉のぼりなどはあげず、ひっそりと生きなければならぬ、という先祖の生活規範が記憶され続けていたのだからか。

また、正月には梗米(うるちまい)を粉にひいてこね上げた碁石形の「だんご雑煮」を食べた。これも落ち武者伝承からくるもので、息をこ

ろすようにして生きていたから餅をつくどころではなかった、ということであろう。現在の氏の家では普通の餅の雑煮も食べるが、昔をしのんで、だんご雑煮も食べているという。

落ち武者伝承は、それなりに歴史の真実の断面を伝えていくに違いない。しかし、鎌倉街道が通り、その宿(しゆく)があった所に、落ち武者が逃げてくるのはおかしい。

とよばれたところで、夏休みは水泳ばかりして過ごした。まだ河川改修前であった。川は曲がりくねっていて、舟運が行われていた時代だから、川幅は今と変わらないが深さはもつとあった。深みに入ったら川底をけって水中にもぐればよいのだが、足で歩こうとしてしまふ。足がつかつかつかない深さの所で、溺れかかった経験は誰にでもある。突橋はまだなく、この乗越河川には渡し舟が通っていて、「おけき婆さん」とよばれる人が舟を操っていた。普段はよく古く、それは滝の城が落ちた天正十八年より以前からのことであるとよく遊んだ。

宗岡に根を張る歌人

細田千虎氏

(聞き手・安齋達雄)

そこから判断すると、細田家は中世末期から上宗岡の地に勢力を張り、ここを根拠地として滝の城に仕えていたが、城が落ちたので先祖伝来の上宗岡の地で農民となったのではないかと、氏は考えている。

新河岸川の思い出

こどものころの思い出といえば、新河岸川の水遊びだ。家のすぐ近くを流れるので、息をこ

近くには柳瀬川もある。新河岸川の川底は泥であったのに対して、柳瀬川の川底は砂利だったから、水は柳瀬川の方がきれいだった。しかし、柳瀬川は、密生したアシなどが両側から空をおおうように伸びていて、こどもが遊ぶ所ではなかった。

学校は、宗岡に一つしかない宗岡小学校に通った。冬になると田んぼに水がはり、それをバリバリ割りながら歩くのが楽しかった。宗岡は冬には

土地が乾くところなので、霜柱が溶けて道がぐちゃぐちゃになることがなかった。宗岡は昔は入間郡だったから、北足立郡だった志木(明治二十九年までは新座郡)のこともたまたまの交流はそれほどなかった。それより、同じ入間郡だった南畑、水谷、鶴瀬、三芳、大井、福岡などと連合運動会を開いた。なぜかサツマイモの産地である三芳とか大井の子の方が体が大きく、いつも勝ちを収めた。

緑肥・井戸・堤

氏は大正三(一九一四)年二月、細田家の次男として上宗岡にうまれた。二十一歳のときに兵役の臨時召集を受け、その後も二度の召集を受けて、中国戦線で餓死寸前の逃避行を敢行した体験を持つ。

除隊になった後しばらく東京に在住したが、終戦とともに現在の宗岡(志木市)に入らないようにするための堤だ。これは南畑村に犠牲をしいることにもなるので、両村の紛争の種となっていた。

氏と同時代の洪水では、昭和十六(一九四一)年のものが最大であった。このとき濁流は佃堤をこえ、上宗岡に流れ込んだ。南畑側では多くの家が庇(ひさし)まで水をかぶり、上宗岡でも床上浸水の家があった。しかし高みにあった

氏や近所の家は濁水が敷地を流れる程度ですんだという。このころの氏は軍に召集されており、たまたま家に帰ってきたが、この洪水に出あったが、これほど大規模なものであったと知ったのは、あとのことであった。



左・佃堤のいま



右・綾橋
上・千虎氏の絵

宗岡のうた

細田千虎氏は、短歌や書をよくし、また絵を描けることでも知られている。詩や短歌の道に踏み込んだのは十七、八歳の頃からという。昭和二十九(一九六四)年には「志木短歌会」を結成し、以後その会長をつとめている。

これは、氏が生まれそだった宗岡の水田風景をうたったものだ。見渡すかぎり田畑が広がっている。宗岡の里は、長い歴史をもつ先祖の地であり、また、氏自身が深く根を張る生活の地でもある。氏の心は、今も誇り高き宗岡の農民である。

水張田(みはりだ)に風の渡れば 日照雨(そばえ)ふるごと光つつ さざなみのたつ

左・航空写真(昭和58年11月撮影)
/日本交通公社出版事業局)



佃堤(つくだづつみ)

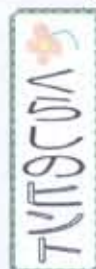
宗岡村(現上・中・下宗岡)は、荒川・新河岸川に挟まれているため、昔から水害を被ることがたびたびあった。江戸時代には、延長八六〇三メートルに及ぶ村総圍堤を築き、村全体を堤で囲み洪水を防いでいた。佃堤は、そのうちのひとつで、上流の南畑村(現富士見市)方面から流下する水を防ぐ目的で、正保年中から寛文の初め(一六四四〜一六六二)頃に、当時この地を治めていた旗本岡部氏の家臣白井武左衛門によって築かれたものといわれています。

堤は、高さ平均一・二メートル、延長一・二三八・八メートルあり、他の堤とは異なり八箇所を曲げていました。これについては、諸説がありますが屈曲をもうけることにより流下する水の勢いを分散させたものと考えられています。



昭和二十七年に行われた耕地整理などによって、その大部分が姿を消し、現存するのは約三〇〇メートルを残すのみであります。

平成三年三月二十日
志木市教育委員会



毎年冬になるとかぜが流行る。なぜか。

冬にはかぜの患者が増えることは、医療機関でなくても良く知られていることである。

その一つは、多くのかぜのウイルスの生存に、冬の低温が好適なこと。しかもかぜのウイルスは冬の低い湿度を好む。例えば、湿度が20%のとき、かぜのウイルスを撰氏21ないし24度の空気にさらした実験では66%が生きている。湿度が50%以上では、6時間後に数%しか生存していないと報告されている。気温が低く、湿度も低い冬は、ウイルスにとって好ましい環境なのだ。

かぜの常識はうそ？ほんとは？

その二に、冬は部屋を閉め切りがちになること。かぜのウイルスの多くは、患者のくしゃみや咳で飛散し、そのまま飛沫が他人の呼吸器に吸い込まれたり、あるいは乾燥した小さな粒子に付着したウイルスが、口や鼻から吸い込まれ、飛沫核から吸い込まれる。閉め切った室内は、粒子が浮遊して、感染する確率は高まる。

その三は、ヒトの呼吸器機能は、冬になって低下すること。感染に対し

て防御の機能を果たす呼吸器の粘膜繊毛輸送は、低温では機能が低下すると同時に、抗ウイルス作用をもつインターフェロンの産生、白血球の活性、抵抗産生能力も寒さによって影響されるものと推測されている。

かぜとインフルエンザは違うもの？

かぜにははつきりとした定義がないが、くしゃみや咳が出るなどの呼吸器症状と、発熱、頭痛、倦怠感などの全身症状を起す「かぜ症候群」というのが、一般的

うことは、科学的にはナンセンスである。ただし実際にそんな経験をした方は少なくないようだ。これには、かぜの潜伏期間と治療の期間とが絡み合っているよう

かぜは、咽喉や鼻粘膜で増えたウイルスが、くしゃみや咳によって飛散して伝染する。咽喉などにウイルスが多く、咳やくしゃみの頻度が高い時期、すなわち症状の重いつきに感染し易い。

例えば、Aさんの症状がピークのときにBさんはすでに感染している。Bさんは数日の間は症状が現れないが、その後症状は出現する。丁度そのころAさんは症状が軽快している。つまりかぜの潜伏期間と治療期間があることが、「うつすと治る」ような錯覚を生じたのである。

原因はほとんどの場合ウイルス感染であるが、細菌の感染によるかぜも、10ないし20パーセントにのぼるとい



新しい年に向かって響きわたる 歓喜の歌... 第九の合唱



ベートーヴェンの第九交響曲の演奏は、年末恒例になっているが、特に第九の合唱には、新しい年を歓喜で迎えようという人々の想いが込められている。昨年の暮れにも声高らかに歌われた。

混声合唱団「志木第九の会」

1991年志木市市制20周年を記念して、ベートーヴェンの第九交響曲が演奏された。この画期的なイベントは、市民に大きな感銘を与えたが、これに参加された市民合唱団の有志が母体となって、「志木第九の会」が誕生した。

「志木第九の会」は、人間として生きる喜びを賛美するとともに、深い人類愛と永遠の平和を希求するベートーヴェンの「第九」を範としている。しかし第九の合唱を歌うだけではなく、広範囲の音楽活動を通して、会員相互の心のハーモニーと地域の音楽文化の向上を図ることを、発会にさいして宣言した。

「志木第九の会」は、会員の「和」と「輪」をモットーとして、志木市民だけではなく、近隣の地域に広く門戸を開き、新座、朝霞、和光、富士見市のほか、さいたま市や川越市、東京都内にも会員の輪を広げている。

定期演奏会はすでに10回を数え、ヘンデルの「メサイア」、ハイドンのオラトリオ「天地創造」などを取り上げ、昨年は11月志木市民会館でフォーレの名曲「レクイエム」などを演奏した。政府、民間から支出される芸術文化振興基金の援助を受け、本格的な芸術活動として、地域に定着しつつある。今年もメンデルスゾーンのオラトリオ「エリア」に取り組む。すでに練習は開始されている。

会誌は「Freude」、ホームページにもアドレスの最後にfreudeがつく (<http://www.2u.biglobe.ne.jp/freude/>)。メールも受け付けている。連絡先は事務局、岡嶋登紀子さん、TEL/FAX・048-473-6368へ。

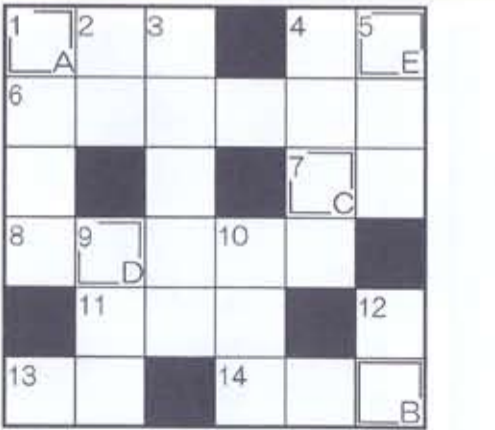
An die Freude

Freude, schoener Goetterfunken,
Tochter aus Elysium,
Wir betreten feuertrunken,
Himmlische, dein Heiligtum!
Deine Zauber binden wieder,
Was die Mode streng geteilt;
Alle Menschen werden Brueder,
Wo dein sanfter Fluegel weilt.

フロイデ シェーネル ゲッテルフンケン
トホテル アウス エリージウム
ウイル ベトレーテン ホイエルトルンケン
ヒンムリッシェ ダイネ ハイリッヒトゥム
ダイネ ツァウベル ビンデンヴィーダー
ヴァス ディー モーデ シュトレング ゲタイトルウ
アレ メンシェン ヴェルデン ブリュエダー
ヴォ ダイネ ザンフトル フリュエゲル ヴァイルトゥ

歓喜の歌

ああ喜びよ、美しい神の光よ、
至福の楽園の乙女よ、
われらは豊かな情熱に満たされ、
天国に、あなたの聖域に入って行こう
離れ離れになった時代の流れを、
神秘的あなたの力が結びつけ、
あなたのやさしい翼のもとで、
人々はみな兄弟となるのだ (編集部訳)



解答欄

クロスワード

クロスワードを解いて 2重マスのA~Eを線で答えです。

- タテのキー
 - 1・初詣で今年の運勢を占ってみる
 - 2・正月の七日の日に春の七草を入れて炊く
 - 3・映画で被写体にクローズアップしていくこと
 - 4・すべて一そろい
 - 5・→ミクロ
 - 9・横か縦に長い円
 - 10・リアルな漫画
 - 12・平和の象徴とされている鳥
- ヨコのキー
 - 1・副食物
 - 4・リビング・ルーム
 - 6・音楽を英語で
 - 7・雪の色
 - 8・TVの「水戸黄門」や「暴れん坊将軍」
 - 11・日延べ
 - 13・オリンピックで一等賞のメダルの色
 - 14・テニスのラケットの網

特定非営利活動法人 NPO 市民フォーラム

この法人は地域住民と行政に対して取材活動を行い、報道によって市民の公共参加を推進し、地域内のメディア事業を行うことで、市民のコミュニケーションを向上させることを目的としています。地域情報紙「市民プレス」はNPO市民フォーラムが編集・発行し、無料で配布します。

◇ 読者の「オビニオン (意見/考案)」を募集します。

TEL 090-3048-5502

編集担当 原宛にどうぞ

□ 本紙は暮らしやすい地域を創るために、市民の方々の取材を通して皆様と共に考えます。 □ また市民が行政と情報を共有することを求めます。

※ ※ ※